

- 第53回日本生化学会大会, 東京(1980)
- 12) ニホンツキノワグマのペプシノーゲンとペプシンの精製及び霊長類との比較検討
景山 節・高橋健治
- 第51回日本動物学会大会, 静岡(1980)

系 統 研 究 部 門

江原昭善・野上裕生
相本 満・瀬戸口烈司

当研究部門の研究の動向と霊長類研究所内での学問的位置については、これまで年報各巻において示してきた。その路線はかなり定着してきたと思う。

研究内容の性格からみて、海外調査が大きな比重を占めるのは当然であり、そのため全員うち揃う期間は稀である。学問上やむを得ないことで、もって厭すべきであろう。

研 究 概 要

- 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究
江 原 昭 善
 1. ヒトおよび霊長類の下顎骨の機能的・形態学的研究
 2. ヒトおよび霊長類各分類群における頭蓋底部の形態とPostureの関連
- 2) エチオピア・アワシュ河流域における鮮新世—最新世化石霊長類の研究
江原昭善・柴田 博(名大)
山崎恒哉(南山大)
- 3) 東海地方先史遺跡出土の人骨・動物骨の研究
江原昭善・相見 満・木下 実
- 4) スマトラにおける現存霊長類の形態学的研究
江原昭善・相見 満
Amsir Bakar (アンダラス大学)
- 5) 硬組織の形態学的研究
野 上 裕 生
- 6) インドネシア国スマトラ島における第四紀地史研究
野 上 裕 生
- 7) インドネシア国ジャバ島における第四紀哺乳類の研究
相 見 満

- 8) 第三紀食虫類・原猿および有袋類の研究
瀬戸口 烈 司
 1. 南米出土化石について
 2. 南北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

論 文

- 1) Nogami, T. (1980): Enamel prism of mammalian tooth. Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto Univ., Series of Geology & Minerology, Vol. XL VII, No. 2

総 説

- 1) 江原昭善(1981): 崩れるか、人類学の二つの神話, 岩波「科学」Vol. 51, No. 7
- 2) 相見 満(1981): ヤチネズミの分類 哺乳類科学, 42号
- 3) 瀬戸口烈司(1981): 南米ザルは偽似ハイポコーンを持っているか。人類学雑誌 Vol. 89, No. 1
- 4) 瀬戸口烈司(1981): コロンビアでサル化石を発見する。モンキー Vol. 171, 172

学 会 発 表

- 1) 相見 満(1980): ジャバ出土のブタオザル化石について
第34回日本人類学会, 民族学会連合大会
- 2) 瀬戸口烈司(1981): 古生物学からみた南米ザルの系統
第25回プリマーテス研究会
- 3) Setoguchi, T. & Watanabe, T.: On the new discovery of the upper dentition of *stirtonia* (ceboidea) from the miocene of Colombia, South America. VII-th International Congress of Primatological Society.
- 4) Setoguchi, T.: The upper dentition of a ceboid monkey, *stirtonia* (mammalia: primates) from the miocene of Colombia, South America. 40-th Annual Meeting of Society of Vertebrate Paleontology (of USA).

報告・学術講演

- 1) 江原昭善・木下 実(1981): 大曲輪遺跡出土人骨の概略。大曲輪遺跡発掘調査概要報告書。名古屋市教育委員会
- 2) 江原昭善(1981): 類人猿と人類 — その関係をめぐって。京大ヴィールス研究所主催学術講演会
- 3) Ehara A.(1981): Meaning of the study of the human evolution. Special lecture at the Central Laboratory and Research Institute, Addis Ababa.
- 4) Ehara A., Shibata H., Yamagaki T., and Assefa M.(1981): Preliminary report on the stratigraphical, palaeo-primatological and prehistorical research along the Awash, 1980.
- 5) Setoguchi, T., et al.: The upper dentition of *stirtonia* (ceboidea, primates) from the miocene of Colombia, South America and the origin of the postero-internal cusp of upper molars of howler monkeys (*alouatta*). Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys. 11, pp.51-60. (1981)

幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・
森 明雄

本施設の建物については設立以来、職員ならびに共同利用研究者共に不自由をしのいできた。昭和55年度の施設整備費で、4部屋の増築が行われ、こうした障害を解決することができた。昭和56年3月末日完成、同4月16日に、市及び幸島のある市木地区の関係者を招いて、ささやかな竣工式を行った。

幸島野猿についての経常的観察を含め、施設の運営は例年どおり順調に行われているが、幸島地域をめぐる観光開発や観光客増加の趨勢と関連して、研究・社会教育・観光の3点の調和を図っていくことに、今後なお充分留意していく必要に迫られている。

幸島群の population は昭和56年4月1日現在

で主群59頭、分裂した“マキ”グループ16頭、ソリタリー13頭の合計88頭である。年令構成ならびに近年の出産率・流死産率などをみると減少の一途をたどる可能性もあるので、くわしい検討を進めている。

群れの状況は概略、次のとおりである。

55年に、リーダーの交替を含む社会変動が生じた。55年4月、この群れのオトナのオスとしては第1位のナベ、第2位のクモ、第3位のイカの3頭が中心にいた。セミソリターのゲシが群れに入ってきた。4月22日に、第2位のクモとゲシの順位が逆転し、ナベ>ゲシ>クモ>イカの順位となった。この順位が以後続いていたが、6月23日、リーダーのナベが消失した。従ってゲシ>クモ>イカの順位となった。7月4日、7月8日、イカが2日間にわたってひどい傷を受け、陸へ連れて帰った後死亡した。さらに9月7日には第3位のオスのクモが島を抜け出た。第1位になったゲシには、群れの個体がついて歩く、また、取締り行動をするといった様子が、最初から見られた。しかしそれでも、最初の一ヶ月間は、職員が餌を持って島へ行くと、群れの個体が無秩序に餌に集中してくるという現象が見られた。こうしたことは、リーダーオスに遠慮して通常は生じないことである。現在群れのオトナオスは、ゲシ>ケバ>ノソの3頭が群れの中心にいる。なお並行して、14才メスのマキほかが主群を離れて行動し、分裂群が成立している。

55年度に本施設を利用した共同利用研究員は、宮藤浩子(京大)と早木仁成(京大)の両名であり、このほかに岩本俊孝(宮崎大)、薄井萬平ほかの研究者による調査研究が行われ、55年度に本施設を利用した外来研究者は日数にして延べ341日である。なお、施設常駐の森 明雄助手は、昭和54年8月以来、西アフリカへ研究調査のため出張していたが、55年8月に帰国した。

研究概要

1) 幸島のサル生態学的・社会学的研究

森 明雄・三戸サツエ

冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集、また毎月1回はほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、個々のトピックスについて調査を進めている。